

「確かな動きを身につける児童の育成」の授業づくり研究

A lesson for pupil to learn a basic movement

原田憲一・杉森弘幸・山本洋平・江川秀文・大澤秀行

Harada kenichi, Sugimori hiroyuki, Yamamoto youhei, Egawa hidefumi and Oosawa hideyuki

1. はじめに

附属学校では、伝統的な日々の教育活動を地道に行うとともに、先進的なよりよい教育を目指して研究を積み上げている。市内の他の実習校とともに、教育実践と実践的研究をまとめ、3年ごとにそれぞれが研究発表会を行い、その成果を公表している。

附属学校でも本年6月に発表を終えたばかりであるが、次の研究に向けて夏から取り組み始めている。その第1回目の全校研究会を体育科で担当することになった。これからの研究方向を示唆できるような授業を提案することができたので、その授業づくりの成果を報告する。

体育は運動を学習すること、まだ出来ない運動をできるように学習することである。体育の目標は指導要領に書かれているように、運動の学習つまり運動をすることによって様々なことを学ぶのも事実である。体育は身体づくりとして健康で丈夫な身体を形成すること、自分の身体で動くことによって課題を解決し、自己実現することである。さらに、スポーツという文化を理解すること、仲間と一緒に活動してコミュニケーションを図る社会的な側面や、努力したり工夫したりして取り組むこと等の個人的な人間形成に関する等々も含まれている。いずれも運動を通しての教育であるが、運動を学習することは運動ができるようになることによって、それらの教育的価値を実現しようとするものである。

分からないことを学ぶということは、これから学ぶ内容はその時点では分からない。体育で言えば、自分ができる運動は、こうすればできると感覚的・身体的に知っているが、できない運動は人の運動を見てどのような運動であるかは視覚的に分かっても、それを自分でどうすればできるかが分からないので運動はできない。

今回は、児童自身ができない動作を、何かと比較しながら学習するという観点で授業づくりを行った。鍵概念として大切にしたのは、できないことや分からないことを、自分ができる運動、既知として知っている何かと比較することによって、思考したり、工夫したりすることとした。つまり、自分ができる運動、分かることを根拠にして、学習することである。

2. 小学校の体育教育

小学校では教科の授業で学習するのだが、児童の学習は授業時間だけではない。児童が学校にいる時間はずっと、給食の時間も、掃除も、昼休みの遊びも含めて児童が学校で生活している間中、全てが教育である。指導要領においても総則第3項に取り上げられているように、健康・運動に関しては、一層このことが強調されなければならない。遊び時間ももちろん児童は遊んでいるが、教育者側から見れば児童の自由な活動を保証しながら教育的観点から配慮と工夫をして教育環境を整えている。特に運動の学習は学校では昼休み等の遊び、普段の生活でも子どもたちは運動遊びが好きの子が多く、体育の時間に運動をするよりもはるかに多くの時間を遊びで運動をしている。そうなると体育の時間に運動を学習するのは、単に運動ができるようになるだけでなく、運動の学習の仕方を強調しておかなければならない。

児童が学校で学習する中心は授業である。授業は、児童が効率よく学習できるように計画的、意図的に作られねばならない。様々な学習内容においても、また様々な児童の個性や理解の度合いにおいても、それぞれに応じて習得しやすく配慮しなければならない。

教育は教師が教えるのであるが、教師と児童との関係は、教える・教えられる関係ではなく、教える・学ぶ関係である。教師の助言や支援が中心であり最も必要な要素であるが、児童は自分自身で思考し、理解し、納得して自分の知識や技術を身につける。教師は児童が学習する際に必要な指標や助言や環境を与え、主体的に学習できるように整えることのみである。また授業では教師と児童の関係だけでなく、学習集団で行われるので学習者同士の関係も必要な環境要素である。

各教科で行われる授業研究の多くは、教師の専門教科で行われているが、通常の授業はすべての教科を行っている。小学校の教育は教科担任ではなく、学級担任制で行っている。つまり教師はすべての教科での指導・教育について修得していなければならない。

子どもの発達・成長の特徴でもあるが、子どもは大人ではなく、子どもの感性や興味さらに大人ではない理解の仕方をする。各教科の理解の仕方だけではなく児童を理解する上においてもあらゆる学習の仕方、理解の仕方を知ることが必要である。初等教育では、教科内容もさることながら、児童をどのように把握し指導するかが重要であるからである。指導する側からのみ児童をみるだけでなく、学んでいる場や、児童同士の関係や教員と児童の関係を外側から観察する時に気がつくことも多い。

子どもは興味や関心なども一様ではない。児童の理解は、一つの教科からだけでなく、さまざまな教科の側面から理解する必要がある。さらに運動教育の体育では、授業の勉強の側面だけでなく、運動遊びや生活の中から児童の捉え方や理解の仕方等、あらゆる面から理解しておくほうがその児童の特徴に合わせて指導や助言がしやすくなる。

3. 全校研究会の手順

授業者だけでなく、いろいろな立場といろいろな視点から複数の教員で同じ授業について吟味することは大いに意味のあることである。今回は全校研究会という場で行ったので、授業者のみならず、学校全体の教員や大学の教員との協同での取り組みながら、また県教育委員会の助言や批判も参考にしながら授業研究をすすめることにした。

授業づくりに関して、基本的には小学校の体育科の教員3名の体育部会で行った。体育科の教員だけではなく校内の他の教科の教員の協力も得た。あまり運動の得意でない教員に実際に行ってもらって困難なところや感覚的にはどんな「感じ」ということを聞き出すことも行なった。できない子の動きは、以前に同じ教材で行った授業の資料から確かめた。

全校研究会の位置付けであったため、校内の研究推進委員会、及び教科群での研究会で、学校の研究方針とこの体育の授業研究の関係についても議論を深めた。

単元の選択や研究構想について、また骨子が進む毎に、大学体育教員との合同体育部会も大学で数回開くことが出来た。運動学や体育学から基本的な理論や応用の仕方などを深めながら確かなものとしていった。

授業公開の研究会においては、県教育委員会の助言、全教員の参観と協力の中で、検討議論を行った。

3. 運動の基本的考え方

今までに行ったことのない運動や初めて出会う運動は、自分の身体を意識的に操作しなければ動けない。したがってまだ出来ない運動は意識的な操作と何回も試行錯誤しながら練習する必要がある。ある程度出来るようになれば何回も練習していれば自動化されるように自分の身体が覚えるまで繰り返すことが重要である。

運動がいわば無意識で出来るようになることは、身体に運動が出来る構造を持っていることになる。つまり身体に図式として構造化された身体を持つことになる。だから身体が存在する外側の環境や状況を知覚するだけで、自分の身体のどこをどのように動かすのかといったことを特別に意図しなくても、状況に合わせた動きをすることが出来る。例えば、「歩く」といったような日常的に自動化されたような運動を考えればそのことはよく分かる。

その身体が持っている身体図式は構造化されているので、どのような構造であるのかを理解しなければならぬ。身体運動の構造は、層として捉えると分かりやすいが、その下位になる動作のうえに成り立っていることがわかる。ある動作の下位にあたる動作があると言える。例えば、「歩く」という動作の下位には、「片足で立つ」という動作がなければ歩くことは出来ない。さらに「片足で立つ」という動作は「両足で立つ」という動作及び姿勢が下位にあると言える。運動が出来るようになるということ、つまり運動が出来る身体の図式を構造化するということは、今まで持っていた身体図式の構造を作りかえると言うことに他ならない。何もないところから新しく構造化することもありえるが、作りかえることは部分的修正をしていくのが妥当だろう。下位の動作の構造化がなされていけば、それを基本とし、修正と変更すればよいことになる。つまり既知の運動を基本として部分的修正をすることになる。

そこで、今回は今できる運動を確かめ、それを基本としてそれと比べて練習することを行うことにした。

5. 運動の習得と学習の仕方

本校体育科部では、体育科教育の本質を「確かな動きを身につけること」としてとらえている。「確かな動き」とは、身につけた動作は、何度も繰り返し行うことができたり、その動作を基本としてさらに高いレベルの動作へと発展させたり、応用させたりすることができる動作である。したがって、課題とした運動が出来るようになるということだけではなく、自らの体の動かし方を身体で理解すること、つまり運動を獲得する仕方を知り、より多くの運動の獲得できる身体を学ぶ必要性があると捉えている。

我々はこれまでも「運動の見方・考え方」を常に基本として、運動を追求する体育学習をめざしてきた。「運動の見方・考え方」とは、「運動の全体」～「部分の動き」～「動きを支える要素」を視点として捉えている。

学習者は、運動を理解する過程において、まず目指す運動（課題）全体を時間経過に伴って一連の流れとして大雑把に捉える。例えば「跳び箱運動」の場合でいうと、「助走をしてきて、両足で踏み切って、手を跳び箱について、両足で着地する云々。」と運動全体を把握することである。次に一連の運動の中で、どこかに意識焦点を置き、どこにアクセントを付けて焦点化すれば運動全体がうまく制御できるという点を捉える。例えば前の例でいうと、「跳び箱に手を着くとき」とか「踏み切り」とかの部分を焦点化する。この場合、習熟の段階や個人によって異なり、焦点化する部分が変わっていく場合があるが、全体の運動を行うためには運動の部分を焦点化するほうが行いやすい。最後にその部分を自分の身体的・感覚的に近づけて、「感じ」として身体で捉える。例えば、上の例でい続けると「両手で跳び箱を強く押すように、グッと着く」とか「蹴るというより、全体重をかけて乗っかるようにドンと踏み切る」といった具合である。これは実際に運動をしたときごとに異なるが、自分が運動を身体的に捉えやすくするための意識化の試みである。

「運動の見方・考え方」を個人的運動の例で示したが、さらに細分化すると自分の一人で行う個人種目と他の人と行う集団やゲーム・ボール運動では当然異なる。運動課題や運動領域に分けて整理し視点をもってめざす動きを追求できるようにしている。

「運動の見方・考え方」は、運動を身につけるための視点となり、学習者は、この「運動の見方・

考え方」に照らして自分の運動をとらえ、動きの試行・修正を図りながら動きを身に付けていくと捉えている。

本研究では、視点をもって運動をとらえ、追求の見通しをもつことを「考える」とし、児童が、めざす動きを追求する上で、運動の見方・考え方をはたらかせる手がかりとして、「比べること」を設定した。児童が動きを「比べること」を通して気付くことは、自分の動きを捉えることになる。自分の運動をより正確に捉えられるようになれば、自分自身の課題を明確にもつことができ、課題を解決するための学習へとつながる。「自分の動きをどう変えていきたいか」という目標が生まれることで、「運動の見方・考え方」に照らして、運動の焦点化する部分を変えたり、意識する身体の「感じ」を変えたりしながら、練習方法や学び方が身に付いていくと考えている。

またこの研究は、これまでの「運動の見方・考え方」についてもさらに検証を重ね、児童が視点としてもちやすく、どの児童にもめざす動きを追求する手がかりとなるようにしくねらいも含まれている。

6. 授業の構成の仕方

願う児童に迫るために、次のように研究を進めていく。

運動習熟の段階をふまえ、運動の見方・考え方をさんこうとしながら、「比べること」の内容と、「比べること」を手がかりとして、めざす動きを位置付けた単元指導計画を作成する。

(1) 指導計画の工夫

単元指導計画を作成するにあたり、これまでも指導内容を設定してきたが、今回の研究では、「比べること」を手がかりとして「運動の見方・考え方」をはたらかせている児童の姿を単位時間ごとに設定する。その姿は、本研究における児童の「考える姿」であり、めざす動きを追求する姿である。

(2) 単位時間の具体的方途

児童が「比べること」を手がかりとして、運動の見方・考え方をはたらかせながら、めざす動きを身に付けるための、単位時間における具体的方途を明らかにする。

方途として、体育の学習では、単位時間の導入において、ビデオや示範等によって、めざす動きを児童につかませる。本研究では、めざす動きの提示だけでなく、単位時間の中で何を比べるとよいかを伝える。それにより、同じ運動種目の動きの違いを比べ、より確かな動きを気付くことができるようにしたり、2つの運動種目を比べることで、共通した動きや本時意識するとよいポイントを着目できるようにしたりする。何を比べてめざす動きを追求するとよいかを課題提示の中で明らかにすることで、その後の展開の中で、児童は自ら「比べること」を手がかりとして運動の見方・考え方をはたらかせることができると考える。

次に、児童が1回ごとの試技に、意図をもって取り組むことができるようにするため、教師が一人一人の動きの課題を正確に把握し、追求の中で「動きの課題」や「何に着目すればよいか」の動きの焦点化を図る。また、児童に合った試技の場を設定し、児童自らその場での練習に取り組むことができるようにしたり、2つの場での動きを比べさせたりして、動きを高められるような指導・援助を行う。教師は、そのような学習の仕方が身に付くよう、試技の中で、常に「比べること」を手がかりとしてもたせ、運動の見方・考え方をはたらかせるように指導・援助を行う。

さらに、個人種目の1単位時間の展開の最後に、1時間の追求の成果を、学級全体の場で一人ずつ発表する場を位置付ける。それにより、自分自身の追求を振り返ることともに、自分の動きの高まりを確認することにつながる。仲間のよい動きを自分の動きと比べて見ることで、めざす動きの全体のリズムや動いた感じ、スピード感や高さ強さなどの違いをつかみ、自分自身の発表の姿に生かすことができると考えている。この発表会によって、授業の導入と終末の動きの違いを比べることで、自分の動きに自信をもつことができるとともに、学習の仕方にまで自信をもって自分自身のものにできると考えている。

7. 授業づくりの作業と工夫

できる運動の中でどんな運動を根拠にすればいいのかわかり出す作業を行った。前述したように、既にできる運動は身体が理解しているのであるから、それを要領や感じを自分で自覚的に取り出し、それを根拠にしてそのように行うこと、つまりある雛形と比較すること、身体と、感覚と、意志で比べることとし、それが運動の思考することとした。本研究での教材は、機械運動の跳び箱で行うことにして、「かかえ込み跳び」ができるようにすることとした。児童にとっては新しい運動であるのでそれをどのように理解して、自分の運動として捉えられるのかを、開脚跳びと比べることを目標とした。

「かかえ込み跳び」は、既習の大きな開脚跳びに比べて、身体全体が跳び箱の上を通らなければならないため、足が跳び箱に引っ掛かるのではないかと恐怖心を抱きやすい。その恐怖心を取り除くために落下点にエバーマットを用いること、また跳び箱を横におくこと、ゴムを用いて超えること、さらに補助や低い段数の跳び箱を順次することも準備した。

開脚跳びと同じ要素の切り返しの運動即ち突き放して身体の方を変えながら前方に浮きあがらせることに着目して、下位にあたる運動を身体で確認するためには、大きな開脚跳びを意識させた。

「かかえ込み跳び」にある新たな要素となる膝を抱えこむ動作や、着手で身体を支え、膝を抱えこむことを重視して、「うさぎ跳び」も用いることにした。

これらを授業の中でどのように取り入れるかを検討しながら、導入の準備運動や、跳び場の設定等練習の場の工夫として取り入れた。

さらに子どもの予想される動きを想定し、視線や着手の位置さらに着手や抱え込み動作のタイミングなど注意点や気づきの観点もあらかじめ準備した。

公開の授業では、他の教員に授業の筆記やビデオを撮影して記録として残し、後で検討する際の材料を残した。

授業の後には全体での研究会を開催し授業を振り返り授業者の意図通り授業ができたか、子どもの反応はどうであったか、全員で検討することにした。

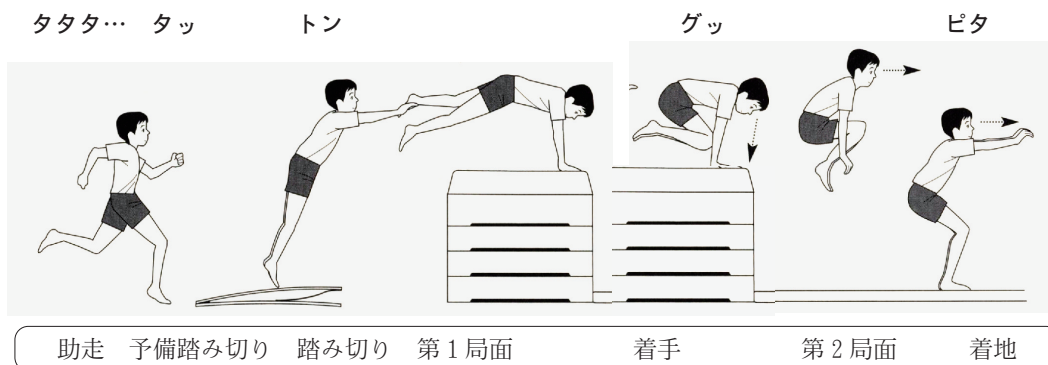
8. 本研究での成果

作成した授業について以下の授業を提示する。

体育科学習指導案

- ・対象 第4学年1組 場所 体育館 授業者 江川 秀文
- ・単元名 跳び箱運動「かかえ込み跳び」

◇全体のリズム



◇部分の動き

予備踏切で勢いをつけ 両足で強く踏み切り 腰を高く上げて跳び 着手から脚をかかえ込み 上体を起こして着地

・指導の立場

1) 教材について

本単元「かかえ込み跳び」は、跳び箱運動の中の切り返し系の技であり、指導要領の中では、「大きな開脚跳び」と並び、中学年の発展技として取り上げられている。

運動の特性としては、身体全体が跳び箱の上を通らなければならないため、児童にとっては既習の大きな開脚跳びに比べて、恐怖心を抱きやすい運動である。そのため、運動そのものは理解できても、実際に行おうとすると脚が跳び箱に当たりそうであるという不安のため、思い切った踏み切りができず、結果として跳び越すことができないことが多い運動である。

かかえ込み跳びは、開脚跳びと同じように、「助走～予備踏み切り～踏み切り～第1局面～着手～第2局面～着地」で構成されており、力強い踏み切りから腰を高く上げ、第1局面から着手にかけて重心を前方に移動しながら両脚を胸に付けるようにかかえ込み、着手して切り返すことによって着地する運動である。本単元では、既習の大きな開脚跳びの学習を生かしながら、「タタタ・・・ タットン グッ ピタ」という全体のリズムを手がかりに、児童が動きを追求できるようにする。その際動きは、大きな開脚跳びと同様に、力強い踏み切りからの腰を高く上げ、重心を前方に移動する動きであり、リズムよく、より大きな空中姿勢をつくることで、着手から着地にかけて、楽に跳び越すことができると捉えている。また、着手時の手での突き放しを強くすることで、上体を起こし、両脚が台上を楽に跳び越すことができるだけでなく、第2局面での安定した姿勢をつくることができ、着地もスムーズに行うことができる。

本時、1時間の学習の中で、腰もしくは下半身をより高く上げ、助走を生かして重心を前方へ移動することで、かかえ込んだ脚が跳び箱を跳び越す動きを身に付けるために、次の2つについての指導に重点を置く。①「タットン グッ」のリズム言葉によって、助走から踏み切りまでの動きをスムーズに行えるようにし、踏み切りの動きから、腰の位置がより高い大きな第一局面をつくって着手できるようにする。②着手の時まで視線は跳び箱を見るように指示し、着手までに体が起き上がらないことによって、重心を前方に移動させながらかかえ込んだ脚が跳び箱を跳び越せるようにする。

共に追求する仲間についても、この2つの点についてお互いの動きを見合い、めざす運動のリズムとの違いや、腰の高さを高くするための踏み切り方向や踏み切った時の上体の傾き、体全体が前方に移動しているかについて声をかけ合うことを大切にする。

1時間を通して運動の見方・考え方をもとに、全体のリズムを手がかりとすることで、力強く踏み切って両脚をかかえ込み、跳び箱を跳び越す動きを追求できるようにする。

2) 指導にあたって

本時は、踏み切りから着手までが早くなることによって、第1局面が小さくなってしまう点を課題としてもち、腰を高く上げるための力強い踏み切りの動きと、それによって生まれる大きな第1局面から「グッ」のタイミングで着手する動きを身に付けられるようにする。

そこで、本時児童のめざす姿を次のように設定した。第1局面で腰を高く上げるかかえ込み跳びを追求していくために、自分の動きを変えようと、考えながら試技に取り組んだり、仲間とお互いの動きについての意見を交流したりする姿を具現するために、次のような手立てを行う。

① 「比べること」を手がかりとして、運動の見方・考え方をはたらかせる課題提示

全体課題である、「力強い踏み切りから、腰を高く上げることによってかかえ込み跳びをする」を提示する前に、VTRを使用し、大きな開脚跳びとかかえ込み跳びを比べることによって、腰を高く上げる必然性と共通性に気付かせる。その後、ボードを見ながら自分の課題を再確認し、課題に合った練習の場で動きの感じをつかめるようにする。

② 運動の見方・考え方をはたらかせる指導・援助および場の設定

『個の課題に対応した場の設定』を選択することである。めざす動きは共通であっても、その動きを身に付けるまでの過程は個によって異なる。場の設定をより個に合わせたものにするすることで、児童自ら場を選択し、めざす動きを追求するのではないかと考えている。そこで、段階を考慮し、単元の導入でつまずきに合わせた練習方法を提示する。本時の自分の課題に合った練習の場を選択したり工夫したりし、めざす動きや自分の動き、仲間の動きと比べながら追求していけるようにしたい。

『個に応じた声かけ』をしなければならない。追求の場面においては、動きの感じや高まりをつかむことができるような言葉かけを行う。また、試技の後に、その場を選択した理由や自分の課題を振り返り、動きのできばえを比べるたりすることができるような言葉かけを行う。

③ 一人一人の動きの高まりに気付かせる発表会

追求の過程を振り返らせ、全体場で一人ずつ発表を行う。本時追求した動きを全体の前で発表し、自分の学びに自信をもつことができるように価値付ける。その際、仲間のよい動きを自分と比べて見ること、自分の発表の姿に生かしたり、自分の動きに自信をもったりすることができるようにしたい。

3) 指導目標と指導計画

全5時間とした。5時間の単元目標として、技能では「力強い踏み切りから腰を高く上げながら、重心を前に移動して脚を抱え込み、着手と同時に台を突き放し、跳び箱を跳び越すかかえ込み跳びをすることができる。」こととした。態度の目標として、「お互いに気付いたことや動きの高まりを伝え合い、仲間と共に繰り返し運動に取り組むことができる。」とし、さらに思考判断の単元目標は「運動の見方・考え方と全体のリズム言葉を手がかりにして、かかえ込み跳びの動きを追求することができる。」とした。

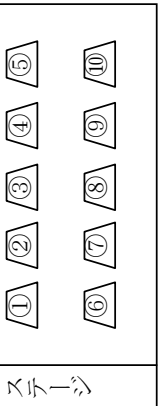
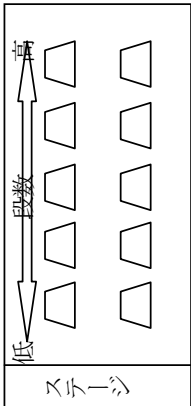
しかしながら体育の目標は、技能が目標であり、技能を高めるために態度や思考判断が必要であるといった関係である。反対の側面からいうと技能が高まれば態度や思考判断に反映されていくことである。決して態度や思考判断が技能と切り離されてあるのではない。

単元指導計画 第4学年 跳び箱運動「かかえ込み跳び」

◇単元目標

- 技能：力強い踏み切りから腰を高く上げながら、重心を前に移動して脚を抱え込み、着手と同時に台を突き放し、跳び箱を跳び越すかかえ込み跳びをすることができる。
- 態度：お互いに気付いたことや動きの高まりを伝え合い、仲間と共に繰り返し運動に取り組むことができる。
- ◎思考・判断：運動の見方・考え方や全体のリズム言葉を手がかりにして、かかえ込み跳びの動きを追求することができる。

◇単元指導計画

学習内容	学習活動	運動の見方・考え方をばらかしている姿	指導上の留意点
<p>○めがずすかかえ込み跳びの動きを知ることができる。</p> <p>●めがずす仲間の姿を知ることができる。</p> <p>◎めがずす動き全体を「ワッ… タッ トン グッ ビタ」のリズムでとらえ、大きな開脚跳びを追求の手がかりとなすと気付くことができる。</p>	<p>【場の設定】</p> <ul style="list-style-type: none"> 準備運動時  <p>【課題別練習時】</p> 	<ul style="list-style-type: none"> ・示範を見ながら全体のリズムをとらえ、大きな開脚跳びと同じリズムであることに気付く姿。 ・大きな開脚跳びとかかえ込み跳びをどちらも試すことにより、動きの違いや共通点を見つけ出す姿。 ・どのように学習していくのか、見通しをもつことができる姿。 	<ul style="list-style-type: none"> ・めがずす動きや仲間の姿を具体的に示す。 ・1時間の授業の流れや場の設定について伝え、学習の見通しをもてるようにする。 ・大きな開脚跳びとかかえ込み跳びの2つの示範から、全体のリズムが同じであることに気付くようにする。
<p>○踏み切った後に素早く膝を引き上げ、足の裏で台の上に跳び乗ったり跳び越したりすることができる。</p> <p>●仲間の動きに対してリズム言葉や励ましの声をかけることができる。</p> <p>◎自分の動きのリズムとめがずす動きのリズムとの違いを比べながら、めがずす動きを追求することができる。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・大きな開脚跳びと比べ、脚をかかえ込み跳びが違ってくることに気付く姿。 ・踏み切った後の脚の動きを追求する姿。 ・できるだけ跳び箱の前方へ跳び乗ったり、跳び越したりできるように、着手をより前方にするとよいことに気付く姿。 	<ul style="list-style-type: none"> ・脚を抱え込むことに不安を感じる児童に対して、台上への跳び乗りから徐々に跳び越すことができるように指導する。 ・腕支那による腰を高くする動きにならないように、常に大きな開脚跳びの動きを思い出すように声をかける。 	<ul style="list-style-type: none"> ・腰が高く上がり、第1局面が大きくなる感じを常に意識できるように言葉かけを行う。 ・つまずきの見られる児童に対して、跳び箱を横にしたり、補助を行ったりする。 ・動いて得たコツや、動きを高めるための手がかりを交流の中で取り上げ、広める。
<p>●お互いに気付いたことや、動きの高まりを伝え合うことができる。</p> <p>◎腰の高さや着手して膝を引きつけるタイミングを手がかりに、かかえ込み跳びの動きを追求することができる。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・大きな開脚跳びを試すことにより、第1局面が大きくなるためのコツを思い出しながら練習する姿。 ・前時の動きや、仲間の動きと自分の動きを比べながら、腰を高く上げるための練習を行う姿。 ・自分の課題を解決するために、場を工夫したり、選択したりする姿。 	<ul style="list-style-type: none"> ・腰が高く上がり、第1局面が大きくなる感じを常に意識できるように言葉かけを行う。 ・つまずきの見られる児童に対して、跳び箱を横にしたり、補助を行ったりする。 ・動いて得たコツや、動きを高めるための手がかりを交流の中で取り上げ、広める。 	<ul style="list-style-type: none"> ・腰が高く上がり、第1局面が大きくなる感じを常に意識できるように言葉かけを行う。 ・つまずきの見られる児童に対して、跳び箱を横にしたり、補助を行ったりする。 ・動いて得たコツや、動きを高めるための手がかりを交流の中で取り上げ、広める。
<p>○着手時の強い突き放しをきつかに上体を起こし、安定した着地をする大きなかかえ込み跳びができる。</p> <p>●お互いの動きを伝え合い、仲間と共に繰り返し練習に取り組むことができる。</p> <p>◎より安定した着地をするために、突き放す方向を手がかりに、かかえ込み跳びを追求することができる。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・着手による切り返しによって安定した着地ができることに気付く姿。 ・大きな開脚跳びのときと比べながら追求する姿。 ・自分の課題を解決するために、できている仲間、動きのコツを聞いたり、見てほしいところを伝えたりしながら自分の動きを高めようとする姿。 	<ul style="list-style-type: none"> ・着手による切り返しによって安定した着地ができることに気付く姿。 ・大きな開脚跳びのときと比べながら追求する姿。 ・自分の課題を解決するために、できている仲間、動きのコツを聞いたり、見てほしいところを伝えたりしながら自分の動きを高めようとする姿。 	<ul style="list-style-type: none"> ・仲間のコツを全体に広げるとともに、一人一人の学習の成果を価値付ける。 ・踏み切りからの腰の高さや、切り返しによってきれいに着地ができるようになったことを価値付けるとともに、運動の見方・考え方や動きの感じを手がかりにした学習について振り返る。
<p>【発表会と学習のまとめ】</p> <p>○これまでの学習の成果を発揮することができる。</p> <p>●お互いの動きの高まりを認め合うことができる。</p> <p>◎めがずす動きである「ワッ… タッ トン グッ ビタ」という全体のリズムと比べながら、かかえ込み跳びを追求することができる。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・仲間の動きを見て、動きの高まりや自分の動きとの共通点を見出し、仲間に伝える姿。 ・追求の過程と自分の動きをつなぎ、動きの高まりに気付く姿。 ・単元の導入時の動きと、発表会での動きを比べながら、高まった動きとその理由を語る姿。 	<ul style="list-style-type: none"> ・仲間の動きを見て、動きの高まりや自分の動きとの共通点を見出し、仲間に伝える姿。 ・追求の過程と自分の動きをつなぎ、動きの高まりに気付く姿。 ・単元の導入時の動きと、発表会での動きを比べながら、高まった動きとその理由を語る姿。 	<ul style="list-style-type: none"> ・単元を通して追求したかかえ込み跳びを、一人一人発表する。 ・動きの成果と追求の過程を結びつけながら、動きの高まりを価値付ける。 ・仲間と共に動きを高め合ったことを価値付け、今後の学習活動にも生かすことができるようにする。

本時の目標 (3/5)

- 技能：力強い踏み切りから腰を高く上げて着手し、脚を胸に引きつけて跳び箱を跳び越すかかえ込み跳びができる。
- 態度：お互いに気付いたことや、動きの高まりを伝え合うことができる。
- ◎思考・判断：運動の見方・考え方を手がかりに、「タットン」で力強く踏み切り、第1局面で腰を高く上げるかかえ込み跳びを追求することができる。

6 本時の展開

学 習 活 動	学習内容にかかわる手だて	研究におけるめざす児童の姿
<p>【準備・準備運動】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・グループで協力して、準備を行う。 ・うさぎ跳びや開脚跳びで準備運動を行う。 <p>【全体会】</p> <p>「タットン」で力強くふみ切って、こしを高く上げてかかえ込みとびをしよう。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・前時を振り返り、本時めざす動きを身に付けるための自分の課題を確認する。 ・VTRや示範の動きから、本時のめざす動きを追求していくための見直しをもつ。 <p>【前半練習①】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・自分の課題に合った場を設定、選択してめざす動きを追求していく。 ・大きな開脚跳びとかかえ込み跳びを、どちらも試技することにより、共通した動きを比較しながらめざす動きを追求していく。 ・助走を生かしながら力強く踏み切り、腰を高く上げて着手することによって、第1局面が大きく感じる感を探りながらかかえ込み跳びを追求する。 <p>【中間研究会】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・前半練習で高まった動きやつかんだコツ、部分の動かし方について交流する。 <p>【後半練習】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・リズム言葉に合わせて、第1局面から着手までの動きを意識することで、安定して跳び越すことができるように追求する。 <p>【発表会】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・本時追求したことを振り返りながら、全体の前で一人ずつかかえ込み跳びを発表する。 <p>【全体反省会】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・本時高まった動きについて、追求の過程や発表会での動きを基に振り返る。 ・本時めざした仲間の姿について振り返る。 	<p>研究内容 2-①：跳ぶこと、をかりとして、跳の足方、軽な足はたかせる課題</p> <ol style="list-style-type: none"> ①VTRで大きな開脚跳びとかかえ込み跳びの動きを比べる。 ②前時の振り返りとVTRから全体課題を提示する。 ③ボードを見ながら、自分の課題を再確認する。 ④示範を見て、めざす動きと自分の動きを比べる。 ⑤課題別に場へ移動し、動きの感じをつかめるように、リズム言葉をかけながら部分の練習を行い、全体の動きの中で確かめてみる。 <p>研究内容 2-②：運動の見方・考え方をほたらかせる指導・援助および場の設定</p> <p>【個の課題に対応した場の設定】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・縦の跳び箱を跳び越すことができない。⇒同じ段数で横にしてみる。 ・助走スピードを生かせない。⇒エンバーマットを用意し、強い踏み切りで跳び越す。 ・踏み切りから着手までで腰を高く上げることができない。⇒跳び箱の手前にゴム紐を張り、腰を高く上げる感覚をつかむ。 ・脚を閉じて跳び越すことができない。⇒段数を下げ、両脚踏み切りからの台上跳び乗りを行う。 <p>【個に応じた声かけ】</p> <p>追求の場面においては、動きを比べることによって、動きの感じや高まりをつかむことができるように、個に応じて言葉かけを行う。</p> <p>【動きの高まりが見られる児童に対して】</p> <p>「開脚跳びの時と比べて今の動きはどうだった？」</p> <p>「さっきの動きとの違いは何かあった？」</p> <p>「○○さんと比べて自分の動きはどう？」</p> <p>「『トン グッ』が開脚跳びのときみたいに、すごく大きくなったね。」</p> <p>【つまづきが見られる児童に対して】</p> <p>「さっきの動きより両足で強く踏み切める感じをやってごらん。」</p> <p>「腰が高くなる感じをつかむために、大きな開脚跳びをやって比べてみるよ。」</p> <p>「開脚跳びのときと比べて、着手の位置はどうだった？」</p> <p>研究内容 2-③：一人一人の動きの高まりに気付かせる発表会</p> <p>追求の成果を、学級全体の前で発表する。自分の動きの高まりを感じとったり、仲間の動きの高まりやよさを見つけて、自分の動きと比べたりする。また、自分の課題に照らし合わせて振り返りをする。</p>	<p>【めざす姿】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・自分なりの動きのコツやひみつを見つけようとする姿。 ・自分の動きを変えようと、考えながら試技を取り組む姿。 ・仲間とお互いに動きについての意見を交流する姿。 <p>【考えるための手がかり】 … 「比べること」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・めざす動きと自分の動きを比べる。 ・自分の前の動きと今の動きを比べる。 ・仲間と自分の動きを比べる。 ・仲間と仲間の動きを比べる。 ・2つの違う場での自分の動きを比べる。 ・既習内容と比べる。 <p>【具体的な姿】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・リズム言葉を手がかりとして、動きの動きを確認している。 ・仲間に対して、自分の動きで見たい部分や伝えたい部分について聞いたりしている。 ・ボードを見て課題や動きを確認している。 <p>評価規準</p> <p>力強い踏み切りから腰を高く上げて着手し、脚を胸に引きつけて跳び箱を跳び越すかかえ込み跳びができる。(技能)</p>

9. 授業の実践

導入のビデオを見るところの部分のみを以下に紹介する。

準備運動でマットの上で「うさぎとび」を3分間行った後、集合をして本時の課題説明をした。「抱え込み跳びのリズムが、大きな開脚跳びのリズムと同じということに気付いた人がいましたが、本当に同じなのか、実際に比べてみてみようか。今日は、最初にちょっと見てもらいたいものがあります。」とビデオで開脚跳びと抱え込み跳びを映し、較べてみた。ビデオを見る方法は、踏切から着手のところで止めてどちらが抱え込み跳びかを問うやり方で興味づけて行った。確かめてから通常で速度で繰り返し見た。

「気付いたことある？」という教師の問いかけに、児童は「タイミングは同じだけど、脚をひこめてもひっこめなくてもリズム言葉同じ」という発言があり、開脚とびと抱え込み跳びが、同じ運動構造、タイミングであることを映像では確認した。

「抱え込み跳びも、踏み切ってから着手までを大きくして、腰を高く上げるとできそうだね。今日は、大きな開脚跳びをして確かめながら練習してみるといいですよ。」

では、「自分の課題も確認しようか。どこにある?」「最後に先生がやってみるから、自分の課題を意識しながら見ようね。」教師はおおげさな動作で師範して見せた。

では、課題別に練習してみましょう。

その後各自の課題を確認してそれぞれが練習を始めた。

次に児童が授業で、どこまでできるようになったかを全5時間の推移を見ることが出来るように、次の表で表した。本時は第3時にあたる。

	第1時			第2時			第3時			第4時			第5時		
	◎	○	△	◎	○	△	◎	○	△	◎	○	△	◎	○	△
縦6	1	0	0	1	0	0	3	1	0	5	1	0	7	0	0
縦5	0	1	0	1	0	0	3	1	0	5	0	0	6	2	0
横5	2	1	1	3	4	0	/	/	/	/	/	/	/	/	/
縦4	2	3	1	3	2	0	5	3	1	6	1	0	5	1	0
横4	1	2	1	3	6	2	4	2	2	5	1	1	3	1	1
縦3	2	3	2	0	0	1	1	1	0	2	3	1	4	2	1
横3	1	1	15	2	1	12	3	3	7	3	2	4	1	3	3
	9	11	20	13	13	15	19	19	10	26	8	6	26	9	5

*第3時より、横5段は行わず

◎助走～着地まで、大きな開脚跳びと同じように抱え込み跳びができる

○助走～着地まで、抱え込んで跳び越すことができる

△抱え込んで跳び越すことができない

10. 考察及び今後の課題

1) 研究協議会

授業を全員で参観した後、研究協議会を行い授業振り返りと本研究に関わってのまとめを行った。以下にその要約を紹介する。

本時の授業から、子どもたちは自分の課題に照らし合わせながら練習場所を選択したり、場を変え

る工夫をしたりしながら、意欲的に追求する姿が見られた。また、自分の動きを様々な対象と比べて動きを身に付けたり、仲間との関わりにおいて動きを身に付けたりする姿も生まれていた。観察者の具体的な意見で言えば、次のようになる。

「比べることを積み重ねていくことによって、自分の考えをもちながら、学び方を考えて動きを身に付けようとする姿が見られた。」

「比べることの内容を、発達段階に応じて整理していく必要がある。」

「比べることによってはたらかせた運動の見方・考え方について、さらに活用していくための指導・援助の在り方を検討する必要がある。」

「課題提示において、既習事項とつなげながら2つの動きを比べることにより、めざす動きを身に付けるための見通しがもてた。」

「単位時間内で個の課題を明確にもたせるための手立てを考える必要がある。」

「自分の動きを主観的にとらえる力を養っていく必要がある。」

「個のつまずきに応じた場の設定をすることで、自分の課題に合わせて意欲的に追求していく姿が見られた。」

「考えながら追求していくために、比べること以外の要素について検討する必要がある。」

「個の課題に応じた追求をしていく中で、自然に仲間と関わりながら動きを高めていこうとする姿が見られた。」

「学習形態、発表会の持ち方などを再検討していかなければならない。」

考えながら動きを身に付けていくという姿とはどのようなものなのかをある程度は確認できた様子であった。しかし、研究に関わっての細かい部分については課題が残されている。今後も記録を残して検証しながら実践を積み重ねていきたい。

2) まとめと課題

全校研究会としてのある程度の提案と成果はあったといえる授業となった。即ち教師側が意図した比べることを学習の手法として授業が成立したこと、子どもは比べることを通して学習したこと、その学習によって子どもは運動技能の成果として上達し、できるようになったことである。

曖昧な部分でさらに検討すべき課題も現れた。自分が出来る運動としての開脚跳びと、これから学習する抱え込み跳びを比べることを意図したが、ビデオや教師の師範、仲間の運動を観察したので、自分の動きではなく客観的な目指す動きとの比較になったようだ。自分が理解している「感じ」、つまり自分の身体から捉えている既知の動きと比べることが出来なかったように見える。提示や説明の方法にあいまいさがあったのかもしれないので、児童は比べる対象を明確に出来なかったのかもしれない。

小学生段階では内容的には難しいことかもしれない。今後検討していきたい課題である。

参考文献

文部科学省(2008) 小学校学習指導要領解説－体育編－ 東洋館

瀧澤文雄(1990) 身体の論理 不味堂出版

原田憲一(2007) 体育科教育の課題 体育・スポーツ哲学会Vol.29 No.2

原田憲一(2009) 教科の枠を超えた視点「体育の見方変えてみませんか」学習研究社

岐阜大学附属小学校(2011) 研究報告「学びを実感する児童の育成」 26 岐阜大学附属小学校

